

平氏の台頭と平安時代のおみたまくらし

平将門の乱

10世紀中頃、親族の間での抗争に勝利した平将門は、関東一円にその勢力を拡大し、ついには、新皇と自称し、独立した勢力を確立しました。当然ながら、朝廷への反乱とみなされ、将門討伐に応じた平貞盛、藤原秀郷らによって平定されてしま

います。上玉里の大宮神社は、10世紀中頃、平貞盛が鹿島神宮の分霊を迎えたとの伝承が残されています。

常陸大掾氏の台頭

将門討伐の論功行賞により所領を引き継いだ平貞盛は、弟繁盛の子、維幹を養子に迎え、常陸南部の所領を譲りました。維幹は、筑波郡多気を本拠に常陸大掾氏として強大な勢力を誇りました。常陸大掾氏はその名が示すように常陸国府周辺を基盤とした在庁官人でもありました。その後の子孫は、常陸の各所に土着して常陸平氏と呼ばれるようになります。

維幹の嫡流である為幹は、財力と権力を笠に着て粗暴な振る舞いが多かったといわれています。寛仁4年(1020年)、紫式部の弟であった常陸介藤原惟通は常陸国府で亡くなつてしまいました。母と妻子は、都に帰らずに常陸国に留まりました。その年の閏12月に平為幹は、惟通の妻子を奪い取る事件を起こしました。藤原惟通の母の訴えにより、為幹は、身柄を都に移され、拘束されましたが、のちの右大臣藤原実資の取り成しもあり、翌年には罪を許されています。



律令国家の象徴でもある国衙は、常陸国では、現在の石岡市に置かれました。都からは国司(常陸介)が派遣され、官人や役人などが政務や儀式を行う施設がありました。

11世紀になると、国衙での政治の実務は事実上、在庁官人である常陸大掾氏が担うようになり、国司(常陸介)は在庁官人の力なしに国内統治を果たすことはできなくなりました。常陸国衙跡の調査では、10世紀後半以降の政務が行われる施設が確認されています。一方で儀式や儀礼の空間は喪失して、規模が大幅に縮小されていきました。

平安時代後半のおみたまくらし

下玉里にある平内遺跡は、霞ヶ浦を臨む台地上に所在しています。この遺跡で検出された土坑では平



平内遺跡の土坑

安時代後半の土師質土器(坏・椀・甕)などや支脚が出土しており、土坑の底面には、焼け込んだ痕があり、土器の焼成遺構もしくは、屋外に設けられた炉である可能性ががあります。平安時代後期の住居は、簡素な掘立柱建物であったとされており、大きな掘り込みを伴わない平地建物は、その痕跡は残ることは少ないと考えられています。都での優美な貴族文化と一線を画する庶民の生活の一端を垣間みるこ

とができます。(玉里史料館 本田 信之)

語句解説

論功行賞 功績の有無や大きさの程度を調べ、それに応じて、ふさわしい賞を与えること。

嫡流 家督を受け伝えていく家柄

常陸介 常陸国の国司の地方官の一つ。常陸国は、親王任国であったため、国司の実務上の最高位。

国司 地方を支配する行政官として朝廷から派遣された役人のこと。守、介、掾、目の四等官。

支脚 カマドに据える煮炊き用の甕を下から支える道具のこと。